

第3項 アフロ・カリブ系とパンジャープ系： その社会言語学的諸様態と音楽ジャンル

ロンドン・ジャマイカ・クレオール

以下、前項で記した二重ヴォイスイングにおいて、バングラデシュ出身の移民に帰せられる「スタイル化されたアジア英語」とは対照ペアを成すジャマイカ・クレオール語、特にここでは、その詳細が社会言語学的調査から、かなり知られている「ロンドン・ジャマイカ・クレオール語」について一瞥する。

最初に、たとえば1980年代前半にロンドン南部を調査したHewitt (1989: 137-140) は、以上の3つの変種を区別していることに留意したい：

- (1) 「エスニック・コミュニティ言語」である、年配者たちのクレオール語（パトゥワ語）
- (2) 黒人若年層⁸²¹の使う「反言語⁸²²」であるロンドン・ジャマイカ・クレオール
- (3) 黒人のティーンエイジャーが用いるロンドン英語変種

821 ジェンダーに関しては、Hewitt (1986: 106) は、黒人若年層の男性の方が女性よりもロンドン・ジャマイカ・クレオールを、よく知っており、そして多く使用していると報告している。

822 「反言語」(anti-language) とは M. A. K. ハリデーによる術語で、少数派となる語用共同体において、主流派の語用共同体の成員たちを排除し少数派の連帯を強化する機能を担う隠語的なレジスターや語用を意味する。たとえば日本の暴力団や芸能界などの「業界語」やそれに類似した俗語（まいうー（うまい）、チャーネー（ねーちゃん）、パツキン（金髪）、モノホン（本物）、デルモ（モデル））、そしてパリやリール、リヨン、マルセイユなどのフランスの都市近郊の貧困層の住む公営住宅地帯（バンリュール／banlieue）などで用いられているヴェルラン（verlan）などが、これに当たる（Horner and Weber, 2018 [2012]: 49, 60-61）。後者は、*envers*（裏返し）に由来する名称で、たとえば *ssepa* (< *passe*)、*béton* (< *tombé*)、*chébran* (< *branché*)、*checla* (< *clasher* (仏語) < *clash* (英語))、*beur*（ブル、つまりマグリブ系移民二世・三世など；< *arabe*）などと、多音節語の第一音節と第二音節とを交替させたり、単音節語を反転させて発音したりする変種を指す。

このうち、(2) は、ジャマイカ出身者に限らず、西インド諸島のどの地域の出身であろうと、黒人若年層が用いる変種で、これは、西インド諸島のどの地域のどの階級の出身であれ、英国においては人種差別に曝され、社会経済的階層の最下層に置かれたという、西インド諸島出身移民によって一般に共有された経験が、二世や三世へと継承され、それに基づき、「ジャマイカ人」、「トリニダード人」、「ガイアナ人」などではなく「黒人系イギリス人」と見なされることを黒人若年層の多くが好むという事実と結びついているとされている（セバ、2013 [1997]: 357-360）。

ロンドン・ジャマイカ・クレオールを調査したセバ（2013 [1997]: 363-367）によれば、この変種は、(1) ジャマイカのクレオール語（パトゥワ語）には見られないような特徴、特に、ロンドン英語からの「干渉」、あるいはロンドン英語のジャマイカ・クレオール語化とでも呼べる現象を含んでいる。たとえば、セバのデータに見られた“im did phone you?” は、im (he) や（助動詞 do の過去形ではなく、不変化の）過去時制標識 did、疑問文の形式（標準英語の平叙文と同じ語順）など、ジャマイカ・クレオール語（パトゥワ語）と同じであるが、他方、同じ少女が発話した“did im give you what you a look for?” には、英語の“did he give you ...” の干渉、パトゥワ語から英語への転移が生み出す混淆形、あるいは英語が文法的基盤にありそれが語彙などにおいてジャマイカ・クレオール語化（パトゥワ語化）されたような混淆形と取りうるものが看取される。セバは、これはロンドン英語からのパトゥワ語への干渉（つまり、ロンドン英語の部分的なパトゥワ語化）による混淆形である可能性を示唆し、その他の事例として、

- ①パトゥワ語では /bada/ (< bother 「悩ます」) となるものが、ロンドン・ジャマイカ・クレオールでは /bava bu:t/ (bovver boots 「ボバークブーツ」; bovver はコックニーで「街での喧嘩」の意味) のように /bava/ となる——標準英語 ([ð]) やパトゥワ語 ([d]) ではなくコックニーなどのロンドン英語変種 ([v]) との共通性に注意したい——
- ②パトゥワ語では [tru:] (through) となるものがロンドン・ジャマイカ・クレオールでは [fru:] となる——同じく、標準英語 ([θ]) ではな

くロンドン英語変種 ([f]) との共通性に注意——

- ③パトゥワ語では [la:] (law) となるものが、ロンドン・ジャマイカ・クレオールでは [luər] となる (下記参照)

などを挙げ、これらは、ロンドン英語 (コックニー変種など) の音韻論的特徴がロンドン・ジャマイカ・クレオール語に現れているものであると捉えている。(上で、ロンドンのイースト・エンドのバングラデシュ系が用いる英語には、コックニーへの同化が見られないとされていたことを想起したい。こうして、バングラデシュ系英語とロンドン・ジャマイカ・クレオール語との間には、コックニーに対する同化／異化という次元に沿った社会言語学的な対照性が看取される。)

特に最後の例 (③パトゥワ語の [la:] とロンドン・ジャマイカ・クレオールの [luər]) に関して敷衍すれば、ロンドン英語では poor と law とは、多くの話者にとって、[puər] と [luər] というふうに脚韻を踏むが、パトゥワ語では [puər] と [la:] というふうに r の存在／不在、母音の質、両面において異なり、ロンドン・ジャマイカ・クレオール語の話者は、ロンドン英語の poor とパトゥワ語の poor との同形性、および、ロンドン英語の law が [luər] であることに基づいて、パトゥワ語の [la:] を [luər] へと変形している——そのような類推に基づいて、ロンドン・ジャマイカ・クレオール語を作り出している——ことが示唆される。(本書第1章や4章で見た過剰矯正や、下方への過剰矯正 (hyperdialectalism) における類推の役割についての議論などを想起したい⁸²³ (小山, 2011))。

これらが、ロンドン英語からのパトゥワ語化による混淆形であること、ロンドン英語の音韻論的特徴がロンドン・ジャマイカ・クレオール語に現れているものであることは、これらの特徴を示すロンドン・ジャマイカ・クレオール語が主に青春期和成人早期に限定されて用いられていること、つまりロンドン・ジャマイカ・クレオール語話者の多くにとっての「母語」(第一言語) はロン

823 他方、言語接触をととした混淆変種の形成、その特徴や類型、諸事例や理論化の試みについては小山 (2022a) 参照。